

母親の育児ストレス国際比較

—韓国(京畿道)・中国(北京)・ブラジル(ブラジリア)・ 日本(静岡)から—

静岡県立大学看護学部

清水 嘉子

抄 録

本研究は在日外国人の国籍別上位3か国である韓国, 中国, ブラジルの故国に住む母親の育児問題を明らかにし, わが国の母親と比較検討することを目的とした。京畿道および北京, ブラジリアに調査用紙を配布し543人より回収された結果を分析した。結果は, ①育児ストレス, 夫に対する思い, 育児をしての幸福感, 女性役割観の国別間に有意差が認められた。②育児ストレスは中国が高く, 次いで日本, 韓国, ブラジルの順となった。③育児ストレスは日本・ブラジル・韓国では, 育児環境に対するものが高く, 中国は子どもの性格や子どもに対する扱い, 育児に伴う束縛感のストレスが高かった。④育児をして親として成長したと感じられる13項目の合計値(親成長)は, 中国が高かったが, 育児をしての幸福感は逆の順位となり中国が低かった。⑤夫に対する信頼や大切な気持ちは日本の母親が低かった。⑥育児ストレスとの関連では, 韓国は夫を信頼している母親, 中国・日本は育児をしての幸福感をよく感じている母親にストレスが低かった。中国は親成長の高い母親にストレスの低い者が多く, 中国・日本は「子どもの手が離れてから仕事をすべき」と考える母親にストレスの高い母親が多かったが, 「家事や子育ての負担を減らして仕事をすべき」と考える母親は中国ではストレスが高く, 日本では低い者が多かった。

キーワード: 育児ストレス, 国際, 比較

I. はじめに

国際化時代の流れの中で, 在日外国人は年々増加の一途をたどっている¹⁾。先行研究では在日外国人上位3か国である韓国・中国・ブラジル²⁾の育児ストレス研究を行った。そこで今回はこれらの在日外国人の故国に住む母親の育児ストレスを中心とした研究を行い, わが国の母親と比較検討することを目的とした。さらに育児をしての幸福感や親としての成長観(以後“親成長”とする), 女性役割観と育児ストレスの関連を分析し, 文化や社会環境の違いによる母親の育児について考察した。在日外国人の故国の母親の結果は在日外国人の理解を深め支援を検討するうえで貴重な資料となろう。

II. 研究方法

1) 調査用紙の作成

育児ストレス尺度33項目(日本の母親を対象として開発された育児ストレス尺度-33項目全体の α 係数は0.91と高く, 各因子の α 係数は0.86~0.58の範囲にある³⁾)に, 夫への思い, 親成長(柏木, 高井が用いた親としての成長項目を一部改め13項目とした⁴⁾), 育児をしての幸福感, 女性役割観など選択式の内容を加えた調査用紙を作成した。対象者の調査負担を考え項目を精選した。調査用紙はそれぞれの母国語(ポルトガル語, 韓国語, 中国語)に翻訳をした後に専門家による翻訳内容の確認を行った。

2) 調査期間

平成12年8~9月:日本の母親を対象にした調

査⁴⁾

平成14年9～12月：京畿道・北京・ブラジリアの母親を対象にした調査

3) 調査用紙の配布

京畿道にある保育園を管轄している行政機関および北京市内の各幼稚園に調査の概要説明と調査の依頼文を送付した。了解の確認が得られた園に調査用紙を送り、各園で調査用紙の配布と回収をした。調査対象である母親は母国語によって書かれている調査依頼文を読んだ後、調査協力に同意した者にも調査を依頼した。一方、ブラジルには園がないことからブラジル在住の知人(LUCIANA S. K. INOUE氏)により、1件ごとに調査の説明を行い調査用紙の配布と回収をした。

4) 分析方法

育児ストレス33項目および親成長13項目は、「全くあてはまらない」から「あてはまる」の各段階に1点から4点とし、項目平均合計値を育児ストレス値、親成長値とした。統計学的処理はWindows版のSPSS ver.11.5にて Z および t 検定を行った。

Ⅲ. 結果

1. 調査用紙の回収

1) 京畿道の保育園に子どもを預けている母親350人に配布し186人回収をした(回収率53%)。2) 北京市の幼稚園に子どもを預けている母親350人に配布し278人回収をした(回収率79%)。3) ブラジルに在住している母親100人に配布し79人回収をした(回収率79%)。4) 静岡県下2市1町の保育園・幼稚園の900人に配布し625人回収をした(回収率69.4%)。

2. 国別対象者の属性

母親の年齢と国籍、夫の年齢と国籍、子どもの数、母親の就業の有無と母親と夫の仕事の時間は表1に示された。

母親の年齢では、各国とも30歳代が多く、次いで20歳代であった。母親の就業では各国とも就業しているものが65～77%と多かった。母親と夫の就業時間は、中国を除く各国ともに8～12時間が多く、中国では8時間であった。子どもの数は、中国を除く各国ともに2人が多く、3人以上は少なかった。中国では1人が多かった。

3. 育児ストレス

各国のストレス値、項目平均値、さらに4か国共通平均値以上項目と平均値未満項目は表2に示された。国別ストレス値では中国が日本とブラジルにおいて t 検定による有意差が認められた($p < 0.01$)。ストレス値で高かったのは中国の86.0、次いで日本の72.6、韓国の72.5で、もっとも低かったのはブラジル69.0となった。上位項目は、下位項目に比べ各国とも重なった項目が多く認められた。ストレス項目No31. 32. 33(表2網掛け「スト31～33」項目)である育児環境に関する内容が4か国に共通して平均値以上を示していた。中国のストレス値は圧倒的に高く、上位項目では1位「子どもの性格に気がかりがある」、2位「子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう」、3位「子どもの世話で他のやりたいことができない」「暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう」となった。

次いで高かった日本では、1位「不可解なことや犯罪に子どもが巻き込まれるか心配である」、2位「就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない」、3位「暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう」となった。日本とストレス値がほぼ並んだ韓国では、1位「就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない」、2位「育児環境が不備なので子どもの行く末に不安を持つ」、3位「子どもの知的能力に気がかりがある」であった。もっとも低いブラジルでは、1位「不可解なことや犯罪に子どもが巻き込まれるか心配である」、2位「就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない」、「育児環境が不備なので子どもの行く末に不安を持つ」となった。各国の下位項目として、ブラジルでは「同じ年頃の子どもと比べわが子が劣っているのではと不安に思う」、中国・日本では「子どもがあまりにも思いどおりにならない」、韓国・中国では「周囲の人に子どもの母親としてしか見てもらえないのが辛い」であった。上位項目と下位項目が逆転していた項目は、日本では「子どもの知的能力に気がかりがある」が低いが、韓国では高かった。

4. 夫に対する思いと育児ストレス

多重回答による表3の結果では、国別間すべて

表1 国別調査対象の属性

人(%)

属性		国名	ブラジル	韓国	中国	日本
母親の年齢	20歳代		17(21.5)	34(18.3)	27(9.7)	151(23.7)
	30歳代		46(58.2)	133(71.5)	220(79.1)	424(66.6)
	40歳代		10(12.7)	14(7.5)	24(8.6)	50(7.8)
	50歳代		4(5.1)	0(0)	1(0.4)	0(0)
	無回答		2(2.5)	5(2.7)	6(2.2)	13(2.0)
夫の年齢	20歳代		3(3.8)	11(5.9)	19(6.8)	101(15.8)
	30歳代		51(64.6)	130(69.9)	208(74.8)	379(44.6)
	40歳代		16(20.3)	35(18.8)	33(11.9)	142(22.3)
	50歳代		6(7.6)	1(0.5)	2(0.7)	0(0)
	無回答		3(3.8)	9(4.8)	16(5.8)	16(2.5)
子どもの数	1人		17(21.5)	58(31.2)	238(85.6)	163(25.5)
	2人		52(65.8)	102(54.8)	22(7.9)	319(50.0)
	3人		6(7.6)	21(11.3)	2(0.7)	126(19.7)
	4人以上		1(1.3)	0(0)	0(0)	17(2.6)
	無回答		3(3.8)	5(2.7)	16(5.8)	13(2.0)
母親の就業	あり		52(65.8)	131(70.4)	216(77.7)	488(76.5)
	なし		24(30.4)	49(26.3)	54(19.4)	128(20.1)
	無回答		3(3.8)	6(3.2)	1(0.4)	0(0)
母親の仕事時間	8時間		10(12.7)	51(25.3)	141(50.7)	
	8～12時間		42(53.2)	78(41.9)	89(32.0)	
	12時間以上		2(2.5)	10(5.4)	4(1.4)	
	無回答		25(31.6)	47(25.3)	44(15.8)	
夫の仕事時間	8時間		9(11.4)	20(10.8)	122(43.9)	
	8～12時間		53(67.1)	118(63.4)	119(42.8)	
	12時間以上		7(8.9)	34(18.3)	22(7.9)	
	無回答		10(12.7)	14(7.5)	15(5.4)	

n = 79

n = 186

n = 278

n = 625

表2 国別育児ストレス

ストレス項目	国名	ブラジル	韓国	中国	日本
育児ストレス値		69.0	72.5	86.0	72.6
項目平均値		2.1	2.2	2.6	2.2
スト1 育児のことを考えると漠然とした不安を覚える		2.5	2.4	2.5	2.1
スト2 子どもの性格に気がかりがある		1.9	2.5	3.2	2.2
スト3 子どもにどう接していいかわからない		1.6	2.3	2.4	1.8
スト4 子どもがあまりにも思い通りにならない		2.2	2.1	2.0	1.6
スト5 育児について期待していたことと現実との間にギャップを感じてしまうことが多い		2.6	2.6	2.7	1.8
スト6 子どもの顔つきや容姿容姿に気がかりがある		1.6	2.0	2.3	2.1
スト7 同じ年頃の子どもの様子を知ってわが子が劣っているのではと不安に思う		1.5	2.1	2.6	2.4
スト8 夫が子育てに協力的じゃない		2.0	2.0	2.2	2.2
スト9 夫は子どもより自分の生活を中心に考えている		1.9	2.0	2.1	2.0
スト10 夫が私の育児生活の苦勞をわかってくれない		2.1	2.0	2.2	2.0
スト11 夫の子育ては不完全でかえって迷惑なことをする		1.8	1.8	2.1	2.4
スト12 子育てしながらでは就職できるところがなくて困っている		2.9	1.9	2.4	2.1
スト13 いつか子育てに余裕ができる頃に就職できるかが不安だ		2.4	1.7	2.3	1.8
スト14 子育てに専念しているために社会から取り残された気持ちになる		2.0	1.9	2.2	2.1
スト15 周囲の人に子どもの母親としてしかみてもらえないのが辛い		2.1	1.7	2.1	1.8
スト16 育児のために睡眠不足の日々が続いている		1.9	1.8	3.0	2.1
スト17 夜間育児のために何度も起きなければならなくて困っている		1.9	1.8	2.9	1.8
スト18 育児で体の疲れがたまっている		2.0	2.1	2.9	2.3
スト19 だだをこねられて困ってしまうことが多い		1.9	2.4	2.8	2.8
スト20 子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう		1.9	2.3	3.1	2.7
スト21 暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう		1.7	2.5	3.0	2.9
スト22 子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる		2.0	2.4	2.8	2.8
スト23 子どもの世話で他のやりたいことができない		1.9	2.4	3.0	2.8
スト24 子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い		1.6	2.1	2.9	2.2
スト25 子育ての毎日同じことの繰り返しに嫌気がさしてくる		1.6	1.9	2.5	2.1
スト26 完全な子育てをすべきだという周囲からのプレッシャーを感じる		2.2	2.2	2.9	1.8
スト27 子育てに関する昔ながらの地域や家の慣習を押しつけてくる		2.2	1.7	2.2	1.9
スト28 祖父母の忠告によって子育てに対する迷いが生じることがある		2.1	1.7	2.7	1.9
スト29 子どもの知的能力に気がかりがある		1.7	2.8	2.8	1.7
スト30 子どもの言語能力に気がかりがある		1.9	2.6	2.7	1.6
スト31 不可解な事件や犯罪に子どもが巻き込まれるか心配である		3.2	2.4	2.7	3.2
スト32 就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない		3.1	3.3	2.9	3.1
スト33 教育環境が不備なので子どもの行く末に不安を持つ		3.1	3.1	2.9	2.5

4ヶ国共通平均値以上項目 出典 文献3)清水嘉子2002bより

4ヶ国共通平均値未満項目

t検定 p<0.01 ブラジルと中国, 中国と日本間に有意差あり

傍線 平均値以上項目

表3 国別夫に対する思い

%

夫への思い	国名	ブラジル	韓国	中国	日本
本当によくやってくれている		25.6	7.5	13.4	37.5
信頼している		11.1	20.5	16.6	0.2
大切に思っている		6.8	17.9	14.4	0.3
他の夫に比べればまし		9.4	9.5	12.7	26.3
思いやりの心を持って接している		16.2	15.9	18.7	0.9
大変だと思うから、多少のことは仕方ない		15.4	17.9	14.4	4.8
相手に期待しすぎる		6.0	1.7	1.6	9.8
自分の気持ちをわかっていない		3.4	2.6	3.2	2.0
その他		3.4	3.7	0.8	0.2
夫は夫、お互いに干渉しない		2.6	2.9	4.2	18.2
合計件数		117	347	620	3255

χ^2 検定 $p < 0.01$ 国別間に有意差あり
 出典 文献2)清水嘉子2002 aより

に χ^2 検定において有意差が認められた($p < 0.01$)。ブラジル・日本では「本当によくやってくれている」が25.6%、37.5%と高く、韓国では「信頼している」が20.5%、中国では「思いやりの心を持って接している」が18.7%と高かった。韓国・中国では「相手に期待しすぎる」、ブラジルでは「夫は夫、お互いに干渉しない」が低かった。他国であげられていた「信頼している」「大切に思っている」「思いやりの心を持って接している」については、日本では計44件、1.3%と低かった。韓国では表7に示されているように「夫への信頼」の高い母親と育児ストレス値(各国の育児ストレス値の上位人数約20%を高値、下位人数約20%を低値とした)に有意差が認められた($p < 0.05$)。夫への信頼のある母親は、育児ストレスが低い者に多く、夫への信頼のない母親は、ストレスの高い者に多かった。

5. 育児をしての幸福感と育児ストレス

各国の母親は、表4に示されているように育児をしての幸福感を感じており、「よくある」が高い値となっていた。各国間すべてに χ^2 検定において有意差が認められた($p < 0.01$)。ブラジルは育児をしての幸福感を感じており、「よくある」が91.8%であった。次いで韓国、日本、中国となった。

ブラジル、韓国、中国、日本では、「たまにある」が20%以上を占め、中国では「よくある」が少ない分40.6%であった。育児をしての幸福感を感じるときが「全くない」が各国ともに1人以上いた。

中国・日本では、表7に示されているように育児をしての幸福感と育児ストレス値(高値、低値)に有意差が認められた($p < 0.05$, $p < 0.01$)。育児をしての幸福感をよく感じている母親は育児ストレスが低い者に多かった。

6. 親成長と育児ストレス

親成長は各国間にも検定において有意差が認められなかったが、表5に示されているように親成長値は中国が高く43.5であった。次いでブラジルの42.4、日本の41.4、韓国はもっとも低く40.6であった。上位項目ではブラジルは「家族のことを思いやるようになった」が高かったが、日本、中国、韓国は「親の苦勞がわかるようになった」であった。下位項目は日本は「少しくらい傷つくことがあっても人と本音で言い合えるようになった」、韓国、中国、ブラジルでは「特に変化は感じない」であった。中国では、表7に示されるように親成長値(高値、低値)と育児ストレス値(高値、低値)に有意差が認められた($p < 0.01$)。親成長の高い母親に育児ストレスが低い者が多かつ

表4 国別育児をしての幸福感

頻度	国名	ブラジル	韓国	中国	日本
よくある		75.9	64.0	51.8	67.7
たまにある		22.8	33.3	40.6	32.2
全くない		1.3	2.2	1.1	0.2
無回答		0	0.5	6.5	0
合計人数		79	186	278	622

χ^2 検定 p<0.01 国別間に有意差あり
出典 文献2)清水嘉子2002 aより

表5 国別親成長

項目	国名	ブラジル	韓国	中国	日本
いろいろな角度から物事を見れた		3.2	3.1	3.3	3.2
親の苦勞がわかるようになった		3.3	3.4	3.6	3.8
小さいことにこだわらなくなった		2.6	2.5	3.2	2.8
周りの人とうまくやるようになった		2.9	3.0	3.3	2.9
仕事への責任感ができた		3.0	3.3	3.2	2.8
家族のことを思いやるようになった		3.6	3.3	3.1	3.3
夫婦の絆が深まった		3.0	2.8	3.1	3.0
子どもの人生があることを受け入れられるようになった		2.9	3.2	3.2	3.4
人の過ちを許せるようになった		3.1	2.9	3.1	2.7
生き甲斐を感じるようになった		3.1	3.2	3.2	3.1
ありのままの自分の姿で人と接するようになった		3.4	3.0	3.2	2.6
少しくらい傷つくことがあっても人と本音で言い合えるようになった		2.9	2.8	3.2	2.4
ありのままの自分でいいと思えるようになった		3.1	2.5	2.9	2.7
特に変化は感じない		2.3	1.6	1.9	2.7
親成長値		42.4	40.6	43.5	41.4

t検定 国別間 ns
出典 文献3)清水嘉子2002 cより

表6 国別女性役割観

%

項目	国名	ブラジル	韓国	中国	日本
結婚したら家事や子育てに専念し、仕事をするべきでない		1.3	6.5	6.8	1.6
子どもが出来たら家事や子育てに専念し、仕事をするべきでない		7.6	5.9	16.5	16.7
子どもの手が離れてからは、仕事をするべきである		50.6	52.7	19.4	8.7
家事や子育ての負担を減らし、積極的に仕事をするべきである		7.6	16.7	46.8	64.6
家事や子育てをしなくていいから、仕事に専念するべきである		10.1	0	1.8	0.6
その他		22.8	13.4	7.9	7.7
合計件数		79	186	278	311

χ^2 検定 p<0.01 国別間に有意差あり

出典 文献3)清水嘉子2002 aより

表7 育児ストレスと夫への信頼・育児をしての幸福感・親成長値・女性役割観(国別)

人

項目	国名	育児ストレス値	ブラジル	韓国	中国	日本
夫への信頼	はい	低値	3	17*	28	44
		高値	2	10*	19	36
	いいえ	低値	14	23*	31	70
		高値	16	34*	43	77
育児をしての幸福感	よくある	低値	15	31	52**	92**
		高値	10	26	3**	49**
	たまにある	低値	2	8	4**	21**
		高値	8	16	56**	58**
親成長値	高値	低値	0	12	15**	27
		高値	6	7	11**	15
	低値	低値	5	4	14**	23
		高値	4	9	3**	22
女性役割観	家事や子育ての負担を減らし積極的に仕事をするべき	低値	3	3	24*	44*
		高値	1	9	34*	36*
	子供の手が放れてからは、仕事をするべき	低値	6	20	8*	39*
		高値	9	24	16*	52*

※ストレス値 上位約20% 高値 下位約20% 低値

※親成長値 上位約10% 高値 下位約10% 低値

χ^2 検定 p<0.01** p<0.05*

た。

7. 女性役割観と育児ストレス

国別女性役割観は各国間すべてに χ^2 検定において有意差が認められた ($p < 0.01$) (表6)。

ブラジルおよび韓国では「子どもが手が離れてからは仕事をするべきである」が高く、それぞれ50.6%、52.7%を占めていた。一方、中国と日本は、「家事や子育ての負担を減らし積極的に仕事をするべきである」が高く、それぞれ46.8%、64.6%を占めていた。また、中国および日本では、表7に示されるように女性役割観と育児ストレス値(高値、低値)に有意差が認められた ($p < 0.01$)。「家事や子育ての負担を減らし積極的に仕事をするべきである」と考える母親に育児ストレスが高い者が中国では多く、日本では少なかった。

IV. 考察

各国の育児に対する政策や環境の違いから、調査用紙の配布方法が異なり、特にブラジルでは知り合いを通じて1件ごとに行われたため、配布と回収に時間がかかった。こうした事情から一定の期間での回収率に差があった。また、今回の調査は、各国の地域に限定されており、地域格差の大きい各国の事情から、必ずしも各国を代表する数値とはいえない。比較の難しさはあるが、次のようなことが考えられた。

1. 育児ストレス

もっとも育児ストレスの高かった中国では、一人っ子を「小皇帝(小太陽)」として宝のように育て、社会主義の名残りで集団での全託保育(24時間保育)が主流である。子どもは国家のものであるという考えが浸透するよう、育児書の中に3歳になったら、祖父母の溺愛から離すことや、全寮制の幼稚園に入れて親から独立した生活をさせるよう強調されている⁵⁻⁸⁾。一人っ子政策で1人の育児にもかかわらず子どもの性格や子どもの扱い、そして、育児に伴う束縛感や疲れを示していた。子どもの数が少ないことから、育児に不慣れであることからくるストレスと考えられた。次いで高かった日本は、育児で頼りにしている夫や実母の協力が少ないことや⁹⁾、核家族化や少子化の中で育児伝承が薄れ孤立化する母親も多い。また、価値観の多様化の中で母親自身の生き方の揺らぎや子

どもを産む価値の変化がみられている¹⁰⁾。さらに姑を中心とした育児を取り巻く人々とのストレスがみられていることなどから¹⁰⁾、ストレスが高いと考えられた。日本と並んでストレスが高い韓国では、子どもの知的能力への懸念や教育環境不備に対するものが多くみられ、教育に対する関心の高さがうかがわれた。韓国では子どもにしっかりと教育を受けさせることが母親の願いであり、また一人っ子の家庭が増えており、合計特殊出生率(1人の女性が一生の間に産む平均の子ども数《15~49歳の女性の年齢別出生率を合計したもの》)が1987年に2.1人あったものが、1997年には1.56と少子化が進んでいる。こうした流れから、1961年以来推進していた産児制限政策(医療保険、税金、公共住宅への入居、公務員の手当などが子ども3人以上の家庭は不利となる)を35年ぶりに撤廃している。しかしながら、こうした政策が十分に浸透しているとはいえず、ブラジルと同様に育児と仕事の両立に対するストレスが高いと考えられた^{7, 10-12)}。一方、ストレスの低かったブラジルでは、合計特殊出生率は1960年代では6人前後であったが、高額所得者らの出生率の低下に伴って1980年代には4~3人に低下している。1990年にブラジルで行われた調査から、1ヵ月の最低賃金の20倍の高額所得者層の世帯の約7割は、4人以下の世帯となっており、子どものいない、または1人の世帯は全体の2割となっている。最低賃金以下の世帯の女性の合計特殊出生率は4.73人となっており、いわゆる「貧乏人の子沢山」のたとえにあてはまっている。今回の結果から育児環境や教育に対するストレスや、働きながら育児している母親に対する社会への不満が高いことを除いて、その他のストレスが低いことが明らかとなった。ブラジル人は、大陸のおおらかさとジェイト(とんち)気質をもち、また他人を責めることに寛大な分、自己に対しても寛大だという傾向がある。大国の気質「おおらかさ」が残っており楽天的である^{14, 15, 17)}。こうしたことから、育児に対してもおおらかに楽天的に対応すると考えられ、その結果ストレスが少ないと考えられた。特にブラジル人は育児を取り巻く人々に対するストレスが少ないことが特徴であろう。今回用いた育児ストレス

尺度は日本の母親を対象に作成されたものであることから、育児に対する周囲の協力要求や夫の育児態度への評価など、日本以外の国では低かった項目が含まれていたにもかかわらず、中国の母親の育児ストレス値が高かったことから、中国の母親に対する育児支援の重要性が浮き彫りにされた。

2. 夫への思い・育児をしての幸福感・親成長

夫への思いでは、「本当によくやってくれている」という共通した思いとともに、日本には少なかった「信頼している」「大切に思っている」「思いやりの心を持って接している」が多かった。日本を除く国では夫との関係のよさがうかがえた。夫の家事育児協力時間の高い韓国や中国、また家族や夫婦の関係を大切にすブラジルなどのこうした背景も反映していると考えられた。特に韓国では、夫に対する信頼の高い母親は育児ストレスが低い母親に多かったことが明らかとなっている。

育児をしての幸福感では、育児ストレスと比較して逆の傾向となっていた。ブラジルは育児ストレスが低く育児をしての幸福感が高かった。一方中国は、育児ストレスが高く、育児をしての幸福感は低かった。日本・韓国はその中間に位置していた。しかし、親成長については、こうした一連の傾向とは異なり、育児ストレスが高く、育児をしての幸福感の低い中国が、親成長が高く認められた。中国の親たちは、わが子をしっかりとした家族構成員とすること自体に大きな価値を抱いている。また、わが子への寛大な振る舞い、たとえばわが子以外の者が悪いとみてどのような時でもわが子をかばう傾向にある。子どもをほめるときに用いられた、「かい(いうことをよく聞く)」という意味の形容詞にあるように、下の者が上の者のいうことをよく聞くことをよいこととしていた考えは、親のいうことを子どもは聞くように育てることで、親子の一体感を強固なものにしている⁶⁾。こうした、育児に対する親としての態度に関する社会的な価値がはっきりしているため、親としての評価や親としての成長観を認めやすい傾向にあると考えられた。そして、親成長の高い母親に育児ストレスの低い母親が多いことから、育児ストレスと親成長は反比例し、また中国および日本では、育児をしての幸福感を「よくある」頻度の多

い母親ほど育児ストレスが低い母親に多かったことから、育児ストレスと育児をしての幸福感は反比例するものであることが示唆された。

3. 女性役割観

韓国とブラジルは、「子どもの手が離れてから仕事をすべきである」という旧来の女性役割観を持っていた。韓国の母親は専業主婦が多く、さらに男子の出産を望む傾向から、出産前の産み分けや出産前の性の識別検査を法的に禁止しているにもかかわらず横行し、墮胎手術まで行われておりその取り締まりも年々厳しくなっている。苦勞して教育を身につけさせ一流の大学に子どもを入学させ家名を高める。自分が社会的に受けた現在の状況に対してわが子にはさせまいという母親の思いは強い^{2~4, 11)}。そして、女性としての役割に対する意識は、子どもの育児を中心に考えられているといえる。ブラジルは早婚で、男性は妻が家庭を守り、自分は外でしっかりと稼いでくるという性別役割観が強い¹²⁾ため、子どもは乳幼児期に保育園や幼稚園に預けることはまれである⁷⁾。女尊男卑の傾向が強い中で、一步家庭に足を踏み入れると、夫と妻の地位は逆転し、生計費の収支の主導権は夫である。妻は家事一切と育児を担当し、食事の後かたづけや皿洗いは亭主の役目という家庭はアメリカほど普通ではない¹³⁾。一方、中国と日本の女性は、「家事や子育ての負担を減らし積極的に仕事をするべきである」という一步進んだ考え方をしており、特に日本では65%近くを占めていた。また、育児ストレスとの関係では、こうした考えを持っている母親は、日本ではストレスが低く、中国では高かった。両国ともに就労している母親の割合は77%前後を占めている中で、子ども数が中国では圧倒的に1人が多く、母親の年齢もやや高い傾向にある。また、中国は韓国に比べ男性優位の社会ではないものの、まだ中国の長い伝統を受けつき亭主関白も多く、共働きで施設支援体制が整っているとはいえ、負担の多くは女性にかかっているという現状^{5~8)}も見逃すことはできない。こうしたことが結果として違いが生じていると考えられた。

(謝辞: 今回の研究にあたり調査用紙の翻訳をお願ひした金漢燮氏、張平平氏、孫継紅氏、野中モニカ氏に心より感謝致します。また、統計処理に

関してアドバイスいただきました。元常葉学園大学増田末雄教授に感謝申し上げます。

(本研究は、平成15年度静岡県立大学教員研究費(学長権限分)の助成で行われた)

文 献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部編. 平成13年度人口動態統計上巻・中巻.
- 2) 清水嘉子. 在日韓国・中国・ブラジル人の母親の育児ストレス—日本の母親との比較から—, 母性衛生. 2002, 43 (4), 530 - 540.
- 3) 清水嘉子. 育児環境の認知に焦点を当てた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究. ストレス科学学会誌. 2002, 62 (3), 46 - 56.
- 4) 清水嘉子. 乳幼児期の育児に関する母親と父親の受け止めと親成長. 日本道徳性心理学研究. 2002, 16 (1), 7 - 16.
- 5) 秋山洋子, 江上幸子, 田畑佐和子他編訳. 中国の女性学—平等幻想に挑む—. 東京, 類草書房, 1998.
- 6) 恒吉僚子, S ブーコック. 育児の国際比較. 東京, 日本放送出版会, 1997, 11 - 83, 133 - 153.
- 7) 深谷昌志. ソウルと北京の母親事情, 良い母親の条件. 児童心理. 東京, 金子書房, 1997, 177 - 183.
- 8) 園田茂人. 中国人の心理と行動. 東京, 日本放送出版会, 1996.
- 9) 清水嘉子, 北村キヨミ, 落合富美江. S市における初産婦の産後1ヵ月頃までのケアニードの明確化—入院形態別分析を通して—. 母性衛生. 2001, 42 (4), 709 - 721.
- 10) 柏木恵子, 永久ひさ子. 女性における子供の価値—今なげ子供を産むか—. 教育心理学研究. 1999, 47 (2), 170 - 179.
- 11) 綾部恒雄. 女の文化人類学. 東京, 弘文堂, 1982, 10 - 115, 282 - 362.
- 12) 増田忠幸. 韓国の女たち. 東京, 華風館, 1990.
- 13) 小倉紀蔵. 韓国人のしくみ—理と気で読み解く文化と社会—. 東京, 講談社, 2001, 54 - 98.
- 14) 国本伊代. ラテンアメリカ社会と女性. 東京, 新評論, 1992, 61 - 85, 141 - 226.
- 15) 斉藤弘志. 新しいブラジル歴史と社会と日系. 東

京, サイマル出版社, 1985.

- 16) 清水嘉子, 西田公昭. 育児ストレス構造研究. 日本看護研究学会. 2000, 23 (5), 55 - 67.
- 17) 三田千代子, 奥山恭子. ラテンアメリカ家族と社会. 東京, 新評論, 1992, 11 - 29, 98 - 115, 276 - 294.

An International Comparison of Childcare Stress in Mothers

— From Korea (Kyonggi-do), China (Beijing), Brazil (Brasilia), and Japan (Shizuoka) —

School of Nursing, University of Shizuoka
Yoshiko Shimizu

Abstract

The goal of this research was to clarify childcare issues for mothers living in Korea, China, and Brazil - the top three countries in terms of foreign nationals living in Japan - and to conduct a comparative study with Japanese mothers. We distributed survey forms to Kyonggi-do, Beijing, and Brasilia, and analyzed responses received from 543 persons. The results showed a significant difference between the countries with regard to childcare stress, attitudes toward the husband, feelings of happiness about raising children, and views of the role of women. The highest level of childcare stress was seen in China, followed by Japan, Korea, and Brazil. Within the category of childcare stress, the highest levels of stress in Japan, Brazil, and Korea were related to the childcare environment, while the highest levels of stress in China were related to the child's character and how the child is handled, as well as feelings of restriction accompanying childcare. Looking at the total scores for the 13 items related to feelings that the responder had grown as a parent through caring for the child (parental growth), China scored the highest, but positions were reversed with regard to feelings of happi-

ness about raising children, where China was the lowest. Mothers in Japan had the lowest scores for trust and caring with regard to their husbands. In terms of correlation with childcare stress, the lowest stress was felt by mothers in Korea who trust their husbands and by mothers in China and Japan who often feel happiness about raising children. Many mothers in China with high scores for "parental growth" had low stress scores, and many mothers in

China and Japan who believe that "Mothers should work after the child no longer needs constant attention" had high levels of stress. Mothers who believe that "Mothers should reduce the burden of housework and childcare in order to work" had high levels of stress in China, but many mothers in Japan who felt this way had low stress levels.

Key words: mother, childcare stress, international, comparison